

居場所づくりと携帯電話： 薬物依存からの「回復」経験の諸相*

南 保 輔

1 はじめに

ダルク（DARC：Drug Addiction Rehabilitation Center）は、薬物依存からの離脱をめざす人びとのための日本独自の中間施設である。1985年にその第1号が開設され（近藤 2009）、創設から27年となる2012年の時点では全国に45の運営団体、68カ所の施設がある。約700人の入寮者が通所者とともにミーティングを行いながら生活している。

薬物依存からの「回復」は長く困難なものである。ダルクという中間施設の利用者のあいだにも、さまざまな回復の航路（コース）があるようだ。われわれダルク研究会は、大都市圏にある2つのダルク（XダルクとYダルク）の協力を得て、その利用者15人（全員男性）を対象とした調査を行ってきた。ミーティングを観察したり利用者本人にインタビューをしたりするほかに、2つの施設で合計6人いるスタッフ（全員男性）にもインタビュー調査を実施した。XダルクとYダルクにおけるフィールド調査は、2011年5月から開始された。利用者に対して1ヶ月から2ヶ月の間隔で継続的にインタビューするというパネル調査を中核としている。本論では、Yダルクの入寮者であるHさんの事例を中心に「回復」経験の一端を描き出す。

薬物依存からの「回復」がどのようなものであるか。回復過程の全体像や個性性はほとんど知られていない。これを明らかにすることをわれわれの調査は目指している。Hさんの事例が興味深いのは、Yダルクを「居場所」としていく過程の最初期からを観察できた点だ。ダルクを最初に利用するようになることを「つながる」と言うが、ダルクにつな

がって居続けることが「回復」の第一歩である。

Hさんの居場所づくりで本論が照準するのは、電話というコミュニケーションツール・情報通信機器にまつわる「コントロール」という側面である。情報化の進んだ現在の生活では、人びとの生活経験は物理空間を越えて広がっている。とくに、覚醒剤という違法薬物の流通では携帯電話がほぼ唯一のコミュニケーションチャンネルとなっている。このチャンネルをどうコントロールするかが、Hさんの居場所づくりの一部となっていた。これを詳細に検討することで、回復初期の居場所づくりを明らかにすることが本論の目的である。

「コントロール」という概念はさまざまな位相や局面で使用されている（宝月 1998；宝月・進藤編 2005）。その一方、「薬をうまくコントロールしているつもりが、いつのまにか薬に振り回される毎日になる」（谷口 2011：9）のが依存という状態である¹⁾。アルコールや薬物依存の領域では、依存物質の「コントロール」がとくに問題となる。その意味では、「回復」のほぼ全域でコントロールが関わっていると言えよう。本論では、携帯電話というコミュニケーションチャンネルに関わるものに着目して、多様なコントロールのうちのある側面を描き出す。

まず最初に、ダルク入寮者のAさんが覚醒剤を再使用したエピソードを検討する。携帯電話を持つことが再使用につながったと自身でも納得している事例である。つぎに、情報通信機器と情報環境論を紹介する。われわれの生活経験が物理空間に制約されたものではなくりつつある状況を、情報環境論は捉えようとしている。この点を確認したうえで、再使用回避につながる自己コントロールに照準する。その具体例として、ダルク通所者のBさんの事例を検討する。Aさんがつながってしまったがために再使用となったのは密売人であった。Bさんは、「いっしょに使いましょう」と誘ってくる仲間との関係を絶とうとして、携帯電話の番号を変更している。

そして、Hさんの居場所づくりを三つの点で論じる。一つ目が、知人の連絡先電話番号を捨てるというワークである。二つ目は、覚醒剤密売人の電話番号を、仲間に教えることである。三つ目として、携帯電話を持っていないことで、好ましくない知人からの連絡が入らないという面がある。Hさんの居場所づくりにかかわる携帯電話のコントロールは、Bさんたちの覚醒剤使用の直接的自己コントロールとは対照的なものだ。

回復初期に特有なものと位置づけて結びとする。

2 リラプスと携帯電話

本節では、薬物の再使用が「スリップ」や「リラプス」、再使用しない状態が「クリーン」と呼ばれることを紹介する。次いで、携帯電話を使って覚醒剤を入手し、リラプス（再使用）したAさんのエピソードを検討する。

人びとが依存に苦しむ物質としては、覚醒剤などの違法薬物のほかにタバコとアルコールがある。なかでもアルコールは使用歴が長く、多くの文化でその使用が認められてきた。依存者も多く、これに対処しようとする動きの歴史も長い（White 1998=2007）。アメリカで1935年に生まれたとされるアルコールクス・アノニマス（Alcoholics Anonymous；無名のアルコール依存症者たち；略称はAA（エーエー））という組織もそんな活動のひとつだが、そこではアルコールの再使用は「スリップ」と言われている。

アルコールクス・アノニマスの回復プログラムをお手本としている、（違法）薬物に依存している人たちの組織がナルコティクス・アノニマス（Narcotics Anonymous；略称はNA（エヌエー））である。NAにおいては、スリップではなく本節のタイトルにあるように「リラプス（再発）」という言葉が使われる。ただし、ダルクの人たちのあいだでは「リラプス」が使われることはまれで、たいていは「スリップ」と言われている。

「スリップ」がなにかを厳密に言うことはむずかしい。ダルク利用者の「依存対象」には、覚醒剤やシンナー、咳止め薬、大麻のほかに、処方薬、アルコール、ギャンブル、セックスを上げることができる。このほかにタバコがあるが、タバコだけはダルクで禁じられていない。ギャンブルも禁じられてはいないが、やめるのがいいとされている。異性との交際は、スリップをしない「クリーン」期間が1年以上続くまでは控えるようにとXダルクやYダルクでは言われている。

ダルクに入寮すると、最初の3ヶ月間は1日3回のミーティングに出ることになる。午前と午後の2回はダルクで、夜は地域のNAミーティングに出席する。NAメンバーは、スリップしないことを「クリーン」

と呼ぶ。「今日一日（ジャストフォアトゥデイ！ Just for today!）」という合い言葉を嘔みしめつつ、クリーン期間を延ばしていくのがダルク利用者にとっての回復の第一歩である。薬物を使いたいという気持ちは、突然「はいってくる」。このときにはいてくるものは「欲求」や「渴望」と言われる（次節の抜粋2を参照）。使いたい気持ちの強度や、それが継続する時間、また「はいってくる」頻度は、人によって、また、状況によってばらつきがある。

以下、本節ではXダルク入寮者のAさんが覚醒剤を再使用したエピソードを紹介する。覚醒剤入手にあたって、携帯電話が不可欠の役割を果たした事例である。

Aさんは40歳代前半の男性だが、約20年にわたる薬物の使用経験がある。ダルクにつながったのも18年まえである。その後何度も離脱を試みてきているが、なかなかクリーンが続かずにいる。そんなAさんだが、クリーン1年のバースデー（誕生日ではなく、クリーン開始日からの記念日として祝う）をすぎて再使用してしまった。以下の抜粋1はその経緯を語っている部分である。

【抜粋1 いやよって押して、非通知で】²⁾

01 A: まあそれからクリーン1年むかえて、使うまえ、まえ
02 の日に一回、あのう、まあそういうふうなサイトで調
03 べてたら電話番号が出てきたんですよ。ビューって。
04 電話番号、あのメールアドレスじゃなくて。ここにお
05 くって、だから電話番号送ってきたから。その前の日
06 に、給料日の前の日に電話したんですよ。いき、い
07 やよ《184》って押して、非通知で。そしたら、も
08 うすんなり買えるっていうんですよ。で、まあ自分も
09 「あした給料日なんで、じゃああした買いに行きます
10 よ」ってつって電話切ったんですよ。まずい、そっか
11 らちょっと具合わるい、いろいろ考えるんですよ。も
12 う、ああ1年を迎えて、こうあんだけいっばい来ても
13 らえてもうと、いろいろ考えるんですけど。だんだん
14 こう、仕事して、一回、仕事場で：昼休みことわた
15 ちんですよ。「きょうはやっぱり夜勤なんで」って、夜

16 勤なんかないんだけど、でことわったんですよ。もし
17 たら、すんなり「ああいんですよ」って言われて、
18 「じゃまたこんど来てくださいね」って言われてこう
19 電話切ったんですよ。それで給料日。給料ってだいた
20 い夕方ぐらいなんです。帰る前ぐらいに。でもらっ
21 て、それでもう、そのときに、なんかお金もらった瞬
22 間またもう電話しちゃって、それでいっちゃったんで
23 すよね。

[12/4/25 ⑨回目インタビュー]

抜粋1で語られているのは、Aさんが覚醒剤を入手した経緯である。覚醒剤は違法薬物でありその売買は禁じられている。買いたいと思ってもすぐには買えるわけではない。Aさんは密売人（Aさんたちのあいだでは「ばいにん」と言われている）から購入したのだが、その連絡には携帯電話が使われた。

薬物入手のプロセスは、まず密売人の電話番号を探すところから始まる。検索機能付きの携帯電話を使って検索「サイトで調べてたら電話番号が出てきた」（02-03行）。その番号に、発信電話番号を「非通知」（07行）にしておそろおそろ電話してみたところ、「すんなり買える」（08行）という返答だった。覚醒剤は違法なのだから、警察のおとり捜査だったりするかもしれない。そんな懸念のもとに非通知発信としたのだが、取り越し苦労だったようだ。

購入先が見つかったとして、つぎは購入資金が問題となる。Aさんは3ヶ月ほどまえに就労して、電話をしたのは3回目の給料日前日だった。それで、「あした給料日なんで、じゃああした買いにいけますよ」（09-10行）と伝えて電話を切っている。10万円ほどの給料を受け取るので、それで覚醒剤を買おうということである。

購入先と購入資金がそろったわけだが、いざ購入して使用するという段になって悩むことになる。使用すべきではないという思いと使用したいという欲求（あるいは渴望）とがせめぎ合う。前夜眠っているときにも当日の工作中にも、使用すべきではないと自分に言い聞かせるべく「いろいろ考える」（11行）。とくに考えたのが、直前に迎えたクリーン1周年のバースデーである。「あんだけいっぱい来てもら」（12-13行）って

祝ってもらった。使用すると、そのひとたちを裏切ることになる。そう考えて一度は購入・使用しないという思いが打ち勝って、「昼休みことわった」(14行)。だが、けっきょくは仕事が終わる夕方給料を「もらった瞬間またもう電話しちゃって、それでいっちゃった」(21-22行)というのである。

断るにしても、購入を申し込むにしても、携帯電話を使って連絡しているところに着目したい。携帯電話だけが可能な連絡手段であるのだから当然ではあるが、携帯電話が覚醒剤へのアクセスチャンネルとなっていることがここに見られる。そして、次節でも見るように、ダルク入寮者は携帯電話の所持が禁じられている。仕事をするようになって、その必要からAさんは例外的に所持が許されている。Aさんの場合、携帯電話がなければ覚醒剤は入手できなかったわけであり、携帯電話を所持していたことがスリッパに直接結びついたということができる。

3 携帯電話を通じてのアクセス

覚醒剤密売人の連絡先をAさんが携帯電話の検索機能で見つけたのは抜粋1のときが初めてのことでない。この再使用に先立つ約2ヶ月前にも見つけたことがあった。そのときは、いちどは連絡先を保存したものの、間もなく削除している。抜粋2は抜粋1と同じインタビューのときのものである。抜粋1の直前の部分で、その経緯を語っている。

【抜粋2 「ほんと買えるのかよ】

01 A: その、あのね、携帯電話もってたんですけど。携帯電
02 話もって：、ま、クリーン何ヶ月かちょっと忘れてたで
03 すけど、1年になるまえに、一回こうまあ、サイトを
04 調べてたんですよ。インターネットでもういま覚醒剤
05 買える時代だってゆうこと聞いてて。「ほんと、買え
06 るのかよ」みたいな感覚でこう調べてたら、そしたら
07 一回ヒットしたんですよ。で、メールアドレスがあっ
08 て。そのメールアドレスを一回お気に入り、まあそ
09 ういう、入れたんですよ。でも、なんかこう、まあす
10 ごい欲求はいつてくるんですよ。でもなんかこう、メ

11 ールアドレスをこう教えて使って、こうまあ（しょう
12 じき）石が入ったらやだなとか思ったり、ま、でく
13 す、消した、消したんですね。その、お気に入りか
14 ら一回削除して。

[12/4/25 ⑨回目インタビュー]

Aさんが入寮しているXダルクでは、携帯電話の所持が禁じられている。就職活動や仕事で必要となると特別に所持が認められる。Aさんが働きだしたのは再使用の3ヶ月前である。仕事の必要から携帯電話を所持することになった（「携帯電話もってたんですけど」（01行）。「インターネットでもういま覚醒剤買える時代だ」（04-05行）と仲間から聞いたAさんは、ある日「ほんと、買えるのかよ」と半信半疑ながら実際に「調べて」（05-06行）みた。適当なキーワードの組み合わせで検索したところ「一回ヒットした」（07行）。抜粋1のとときは違って電話番号は表示されず、ヒットしたウェブサイトにはメールアドレスが掲載されているのみだった。これを「お気に入り」に保存したが（08-09行）、そうすると、薬物を使用したいという「すごい欲求」が「はいつて」くる（09-10行）。「欲求が入る」というのは薬物を使いたい気持ちがいってくるということだ。

この欲求をどのように抑えるかが依存症者にとっては最大の問題である。Aさんは欲求に打ち勝って、お気に入りに登録した連絡先のメールアドレスを「消した」（13行）が、その大きな理由はインチキを恐れたからだ。電話番号ではなくメールアドレスのみを表示しているサイトは、そこにメールを送ることになる。そうして注文すると、お金を銀行口座に振り込めと言われるだろう。振り込んで商品が送られてきたときに、覚醒剤ではなくて「石が入ったらやだな」と考えたというのである（12行）。

一度は再使用を踏みとどまったAさんだが、そのときに購入資金の用意ができていたのかどうかはわからない。いずれにしても、違法薬物の購入先が携帯電話の検索機能で容易に見つかるという状況にあることが見てとれる。クリーンを続けて回復していくためには、Aさんには好ましいことではない。もし、つぎに携帯電話が必要となったときには検索機能のない携帯電話があればそれを持つことにしようと考えたりして

いるところである。

4 コミュニケーションメディアがつくる 生活経験と社会生活のコントロール

覚醒剤密売人の連絡先をAさんが知った2つのエピソードを見た。いずれも携帯電話の検索機能を使ってのことであり、そのうちの1回では実際の購入と使用に至っている。Aさんは、以前にも携帯電話で密売人と連絡をとって覚醒剤を購入したことがある。もし携帯電話がなければ、今回も前回も使用には至らなかったかもしれない。携帯電話という情報通信機器が、コミュニケーションメディアとしてAさんと密売人を結びつけて覚醒剤の売買を可能とした。以前に同様のことがあったときには、覚醒剤を使用したAさんは逮捕され懲役となった。生活経験を大きく左右するメディアの使用例である。

コミュニケーションメディアが作り上げる生活環境を研究するものとして情報環境論がある。かつて生活経験の基盤であった「コミュニティ」は土地に根ざしていた。人びとの生活経験はある物理空間内に限定されていた。対照的に近年では、情報通信機器とネットワークの発展によって、「ヴァーチャルコミュニティ」と呼ばれるような地理的な制約を持たない社会生活のありようが出現しつつある。

Srinivasan (2007) は、アメリカ原住民の情報ネットワークシステムの構築について調査している。カリフォルニア州サンディエゴ郡のアメリカ原住民居留地は地理的に分断されている。これらの人びとが文化遺産を共有し民族アイデンティティを維持するものとして、「Tribal Peace」という文化情報システムを構築した。情報通信技術が過剰なグローバル化を促進しているという批判がなされているが、Srinivasan は、人びとが独自の必要性を充足するために情報システムを活用していく可能性を指摘している (2007)。

南 (1995) は、同じアメリカ西海岸の日本人コミュニティの人びとの情報行動を調査した。インターネットが発達する以前の1990年に行われた調査に基づいたものだが、日本のテレビ番組を録画したVHSのレンタルがさかに行われていた。レンタルショップのほかにも、個人が日本の知人から送ってもらったVHSを「回し視聴」ということも行

われていた。また、日本の新聞と雑誌の回し読みもさかんであった。英語のテレビ視聴や新聞購読に苦勞する人びとは日本語を使って生活しており、日本語メディアがその生活経験の一部となっていた。「コミュニケーションメディア」と言うときには情報通信機器という「ハードウェア」が想起されがちだが、言語という「ソフトウェア」こそがメディアの中核であることが感じられた。

生活経験をコミュニケーションメディアがつくるというとき、チャンネルとしての情報通信機器とメディアとしての言語という側面があることを確認した。人びとは、これらをコントロールして自分にとって居心地の良い居場所をつくっていくものと考えられる。

「コントロール (control; 統制・統治)」という言葉は幅広い意味で使われている。違法薬物使用との関連で「コントロール」と言うと、司法によるコントロールが想起される (宝月 2004)。他者から行動の制約を受けるようなものだ。だが、本論では自分が自分に働きかけるような自己コントロールを取り上げる。

また、「痛みや感情をコントロールするために薬物を使用する」という文脈で「コントロール」が使われることもある (熊谷; 綾屋 2010)。「共存」の関係にある2人が、相手を「コントロール」して依存し依存される状態をつくりだし維持しているというときに言われることもある (谷口 2011)。

本論においては、違法な逸脱行為に関与することを回避しようとする自己コントロールに着目する。「社会生活のコントロール」の諸相を統合的に論じた宝月は、コントロールを「人びとの行為・状況を特定の望ましい方向に導く意識的な作用」と定義する (1998: 1)。「特定の望ましい方向」は主観的なものであり、先述のようにイライラした状態から脱するために覚醒剤を使用することも「コントロール」となりうる。だが、繰り返しになるが、本論では「回復」という覚醒剤を使わない状態を「望ましい方向」とする自己コントロールを問題とする。

5 コントロールとしての電話番号変更

薬物依存からの回復者が、接触を制限しコントロールしようとする対象は密売人にかぎらない。Bさんがかつて薬物を常習していたときには、

ほかのひとつといっしょに覚醒剤を使用するということが多かった。本節では、薬物使用につながりそうなひとつとの関係を絶つために電話番号を変更したというBさん（60歳代前半の男性）の事例を紹介する。長くて辛い受刑生活を経て固く離脱を誓ったBさんだが、かつての「仲間」からの誘いがきっかけで何度か再使用に至っている。

BさんはXダルクには入寮せずに通所している。以前からの居所があるので、出所後もそこに住んでいる。入寮していないために携帯電話を所持し続けている。通所しはじめた当初には、Xダルクで携帯電話所持が禁じられているということを知らずに使用して注意されたこともある。

Bさんは覚醒剤の単独使用がほとんどない。この点については、以下の抜粋3のように述べている。

【抜粋3 ひとりで使うっていうことは、考えられない】

- 01 B: 自分の場合ずうっとまわりに何人もひとがいて、いつ
02 もいっしょにこう、使ってたから、ひとりで使うって
03 いうことは、考えられないわけですよ。

[11/8/30 ④回目インタビュー]

このように、Bさんは「まわりに何人もひとがいて、いつもいっしょに」薬物を「使ってた」(01-02行)。「ひとりで使うっていうことは、考えられない」(02-03行)のである。実際のところ、離脱決意後の再使用はつねにだれかに誘われたり、そそのかされたりしてのことだった。

Bさんは、出所してすぐにXダルクに通所を始めて約5年が経過している。「回復」実践経験5年というわけだ。その間数回携帯電話番号を変更している。すべて「悪い仲間」との関係を断ち切るためだ。そのなかのひとつを詳しく検討しよう。以下の抜粋4がこれについて語っている部分である。

【抜粋4 全部変えた】

- 01 B: 《略》それで、ああこれはもうだめだなってなって。
02 もう、すべての電話と、変えたんですね。電話番号と
03 メールを変えて連絡がつかないようになってる。で、

04 あの家はね、幸いにもこう。入り組んでいるから家に
05 まではこれないですね。だからさいごに、もう。もう
06 ちょっとね付き合うことはできないっていうメールを
07 入れてね、こう。うん。全部変えたんですね。携帯2
08 台。その：携帯2台もその子と話をするために。え：
09 購入したもう1台の携帯なんですけども。う：んまあ
10 2台も必要ないんですけどね。1台でも十分なんです
11 けども、なんか余っちゃったみたいな感じでいま持つ
12 てるんですけども。

[12/1/26 ⑥回目インタビュー]

抜粋4で語られているエピソードにおいて関係を絶とうとしている相手は女性である。かつてBさんが連続使用をしていたときに、いっしょに覚醒剤を使ったことがある。Bさんが受刑中は連絡が途絶えていた。出所後しばらくして連絡が来た。かつては、Bさんが入手して覚醒剤をいっしょに使っていた。今度も、Bさんに覚醒剤を入手してもらい、いっしょに使いたいというわけである。

薬物からの離脱を決意しているBさんは、その要請を拒否してきた。女性には、自分と同じように離脱するように、そのためにダルクとNAに通うようにと説得してきた。Bさんは、この女性と話すために2台目の携帯電話を契約するということまでしている（「その子と話をするために。え：購入したもう1台の携帯なんですけども」08-09行）。かつていっしょに使ったことに責任を感じているのか、ぜひともやめてもらいたいと願ってのことだ。

携帯電話で話すほかにも、直接会って話したことも何度かあった。だが、女性はどうしても使用をやめなかった。説得できないと判断して（「ああこれはもうだめだな」01行）、これ以上関係を続けると自分もいよいよ再使用となることを恐れたBさんは「すべての電話」番号を「変えた」（02行）。「電話番号とメールを変えて連絡がつかないように」した（02-03行）。「さいごに」、「もうちょっとね付き合うことはできないっていうメールを入れて」のことである（05-07行）。

この女性はBさんの家に来たこともあるが、ひとりでは来られない。Bさんの家の近くは道が「入り組んでいるから家にまではこれない」（04

-05行)。電話番号を変更すると、女性からBさんに連絡は取れなくなる。携帯電話番号を変更したからといって、絶対に連絡が取れなくなるというわけではない。そもそも10年近く連絡が途絶えていたこの女性は、共通の知人を通じてBさんの電話番号を知ったのだった。

Bさん自身、大切なひとから「同じことをされた」経験がある。別れた妻とのあいだに娘がいるが、その娘が自分からの連絡を絶つために電話番号を変更したと思い込んだことがあった。あとで勘違いとわかったのだが、そのときの「辛さ」ははっきりと日記に記録されている。親しい人が自分に知らせずに電話番号を変更するということは、関係を絶ちたいという明確な意思表示である。Bさんはそのことを知っていた。この女性からの連絡はなくなり、Bさんはそのおかげもあってその後もクリーンを続けることができた。

6 「逃げ道」の電話番号

Bさんの場合は、他人の薬物使用に巻き込まれることの回避が携帯電話番号変更の理由であった。「コントロール」のひとつと位置づけることができるものだ。本節以降では、Hさん（20歳代前半の男性）が電話番号を「コントロール」するワークをいくつか見ていく。それらは大きく分けて3つある。

- ワーク1 知人の電話番号を保持する／捨てる
- ワーク2 密売人の電話番号を他者に教える
- ワーク3 携帯電話を所持しないことで守られている

電話番号を保持したり他者に教えたりすること（ワーク1と2）は、Hさん自身のワーク（「為事（しごと）」との訳語が可能である）である。対照的に、携帯電話の所持はダルクの規則として禁じられていて、Hさんはこの規則に従っているだけだ（ワーク3）。Hさんの主体的関与の度合いは異なるが、これらワークの結果としてYダルクでの生活はHさんが回復していく場、居場所となっていた。これらを順番にみていこう。

Yダルクに入寮しているHさんは、入寮してしばらく知人の電話番

号と密売人の電話番号を書き込んだメモをたいせつに持っていた。なんらかの事情でYダルクを出ることになったときにはこの知人の家に泊めてもらうつもりだった。身よりのないHさんにとっては、「逃げ道」である（以下の抜粋6参照）。だが、この知人は薬物常用者である。ダルクにいる間は規則を守って使わないと決意しているHさんだが、ダルクを出て、知人のところに行くということは再使用に直結すると理解していた。

覚醒剤密売人の電話番号も、その保持が問題となるものだ。この点はいちど調査チームとのインタビューで話題となったことがあった。Hさんは、番号のメモを持っていることをYダルクに入寮してすぐにスタッフに告げた。すると、スタッフは捨てなくていいと言ったというのである。なぜかという調査者Rの問いに対する回答が抜粋5である³⁾。

【抜粋5 お守りとしての電話番号】

- 01 H: 捨てたら、欲求が強いときにもう衝動的にこう探しに
02 いくだろうって、持ってたらまだあるっていう売人の
03 番号があるから大丈夫って、そういう気持ちになれる
04 でしょうって言われて。持ってなかったら衝動的に速
05 攻探しに行っちゃうから。病気の人はそうだから、そ
06 れは捨てないほうがいいと言われて。
- 07 R: あの：、衝動的に探しに行くと、どういう
08 H: クスリ使っちゃうはめになっちゃうから。
- 09 R: あっ逆に。
- 10 H: はい。
- 11 R: あっ、この番号持つてることで、逆にストッパーにな
12 るっていう。
- 13 H: そうです。またいつでも使えるっていう。
- 14 R: ああ：。
- 15 H: だから今日はまだ大丈夫、今日はまだ大丈夫みたいな
16 感じなんです。だからそれを自然にもういらないやっ
17 て捨てれるようになるまでは持ってていいよと言われ
18 たんです。だから逆にお守りみたいな感じで。まあお
19 守りじゃないんですけど。

20 Q: あっはは。

21 R: あ:そういう発想なんですな。

[11/10/25 ③回目インタビュー]

抜粋5では、依存症という「病気の人」(05行)の行動パターンが語られている。Aさんのリラプスについて2節で見たように、購入先を探して、購入代金をつくり、実際に買いに行くと、使用に至るまでにはいくつものステップがある。薬物依存症という「病気の人」は、「衝動的に探しに行く」と(07行)「クスリ使っちゃうはめになっちゃう」(08行)。いくつものステップを一気呵成に駆け抜けてしまうというのである⁴⁾。

だからこそ、「探しに行く」という最初のステップを踏み出さないようにすることが大切である。「今日はまだ大丈夫」(15行)とされている「お守り」(18行)として電話番号を持っていることを勧められたわけである⁵⁾。

ここまで、密売人の電話番号を「お守り」として保持することで、再使用を回避するというワークを見てきた。つぎに、知人の電話番号を捨てるというHさんの決断について検討する。この知人は薬物常習者であり、この知人に電話連絡をするということはHさんの再使用に結びつく。Hさんは、この知人宅をダルクからの「逃げ道」だと考えていた。このような意味を持つものである知人の電話番号を、ある時点で捨てたというのである。

以下の抜粋6では、知人の電話番号を捨てた事情が語られている(密売人の電話番号も同時に捨てたのだと推測されるが、確認はできていない)。抜粋6が取られたインタビューは、抜粋5のインタビューから6週間後のものである。抜粋6の直前の部分では「スリップ」した出来事が話されている。薬物依存症からの回復をめざすひとにとっては、覚醒剤といった「本命」薬物のみならず、睡眠薬や精神安定剤などの処方薬の不適切な使用や、アルコール使用もスリップである。Hさんはアルコールを飲んで入寮以来続けてきたクリーンを破ってしまった。その顛末を一通り語り終えたところでの「でも今回」(抜粋6の01行)のことである。

【抜粋6 もう捨てた】

- 01 H: でも今回、番号持ってたっていったじゃないです
02 か。もう捨てたんですよね [()]
03 R: [おお::: なんで捨
04 てようとしたの。
05 H: ん。いままでこう逃げ道が：揺らいでたっていうか。
06 こう自分でいちおう逃げ道はつくってた：ですけど：
07 もうその逃げ道を自分でちょっと(.)なくそうかな
08 と思って。
09 R: へ::::

[11/12/13 ④回目インタビュー]

「番号」を「捨てた」(01-02行)ということだが、これは調査者たちにとって驚くようなニュースである。「おお:::」(03行)という応答がそれを示している。抜粋5に見たように、密売人の電話番号を「お守り」としていたことを知っているからだ。それで、「なんで捨てようとしたの」とその理由を尋ねている(03-04行)。

Hさんは、知人宅を「逃げ道」と考えていた。そのために安心感が得られたが、他方気持ち「揺ら」ぐことにもなった(05行)。Yダルクを飛び出したときの「逃げ道」があるということは、Yダルクを居場所と思う気持ちを中途半端なものにする。「その逃げ道を自分でちょっと(.)なくそうかなと思っ」たのである(07-08行)。

ダルク入寮後半年以上もたいせつに持っていた知人の番号を捨てることに踏み切らせたのは、スリップ騒動のなかで、いちど電話して応答がなかったということが関係している。「逃げ道」と思って持ち続けてきたが、いざとなれば「逃げ道」とならなかったということだ。つまり、それまでは、Yダルクに居続けるために、知人の番号を持っていた。Yダルクがいやになったときに行く場所があるという「逃げ道」の存在が安心感を生み出していた。だが、「今回」のスリップを経て、「逃げ道」をなくすことにした。これは、Yダルクを「居場所」と決めるということだ。最初はYダルクにいるために知人の番号を持っていたが、それを捨てることで決意を固めたということになる。

7 嫌いな仲間を追い出す

Yダルクを自分の居場所とする決断が、知人の電話番号を捨てるという行為と結びついていることを前節で見た。これを、居場所づくりワークのひとつ（ワーク1）とするならば、Hさんの居場所づくりワークの別の側面（ワーク2）も電話番号と関係するものであった。

それは、Yダルクの同じ入寮者であるSさんに覚醒剤密売人の電話番号を教えて「追い出す」ことだった。抜粋7がその経緯を述べている部分だ。Hさんは、Sさんに教えるようにとせがまれていた。Hさんはずっと断っていたのだが、「最終的にしつこくて」（19-20行）教えてしまう。すると、Sさんは電話番号を知ったその日のうちに「使いに行っ」てしまった（35行）。

【抜粋7 もどんなければいいなと思って】

- 01 H: うん。ずっと嫌いだったんですね。Sさんを。
02 R: ふ:::ん。
03 Q: ん。
04 R: 最初から？
05 H: 来てからですよ（ ）さん
06 R: ふ:ん。
07 H: 1ヶ月たってぐらいからですね。
08 Q: ()
09 H: ん。で自分もなぜきらいなのかわかんなくてその人の
10 ことが。
11 Q: あ:ん。
12 R: ふ:ん。
13 H: で:::(3.0) でそれでこう「ばいにんの番号おしえ
14 て:」ってずっと言われてたんですけど。
15 Q: ああむこうから [言われてたんだ。
16 H: [むこうから言われてて。
17 Q: へえ:::。
18 H: まあ自分は (0.5) さいしょのころことわってて。

- 19 「いや：、いやです」とか言ってたんですけど、最終
20 的にしつこくて。
- 21 Q： ん。ふん。
- 22 H： その日おしえたときが。
- 23 Q： ん。
- 24 H： (1.0)「なんで教えないの」とか(.)言われたんで。
- 25 Q： はあ：：：：：
- 26 H： 自分、べつ(に)教えない理由がないというか。もう
27 きらいだから、
- 28 Q： ん、ん。
- 29 H： それでどっか行ってもど：ん：：なければいいなど
30 思ってたんですよここに帰ってこなければいいなっ
31 て思って
- 32 Q： ん、ん
- 33 H： おしえたんですよ＝
- 34 Q： ＝ん：
- 35 H： そしたらその日に、ほんとに使い行っちゃって。
- 36 Q： ん。
- 37 H： 買いに行行って使って、
- 38 Q： ん。
- 39 H： 帰ってこなかったんです。
- 40 Q： (.) ああー。
- 41 R： しつこく聞いて来るん [だ。
- 42 H： [はい。
- 43 (2.0)
- 44 R： え：たいへんだったねでも。
- [11/10/25 ③回目インタビュー]

「しつこく」教えるように言われたときに、「なんで教えないの」かと
までSさんに言われた(24行)。それで、「教えない理由がない」(26
行)、「きらいだから」(27行)とHさんは教えたのである。「どっか
行ってもど：ん：：なければいいなど思ってたんですよここに帰ってこ
なければいいなって思って」(29-31行)のことである⁶⁾。

ダルクには、入寮者の再使用につながるようなことをすべきではないという原則がある。Hさんもそれは知っていた。Sさんが再使用をしたあと、Hさんはダルクのスタッフから指導を受けることになる。「もどんなければいい」(29行)と思っていたものの、「しつこく聞」かれて(41行)教えるというのは「たいへんだった」と調査者が理解を示している(44行)。

「嫌いな」仲間を「追い出す」だけでは居場所づくりとは言いがたいかもしれない。Hさんは、なぜSさんを「嫌い」なのか。その理由が重要である。その理由は、電話番号を教えた時点ではHさん自身わかっていなかった。抜粋7のときのインタビューではそれが特定されることがなかったのだが、6週間後のインタビューではHさん自身がひとつの理解を示していた。それが抜粋8である。

【抜粋8 もう嫌いではないですけど】

- 01 H: Sさんの場合は最近はまだ嫌いではないですけど。
02 R: あ、そうなんだ。
03 H: 自分もスリップして。ここに最初スリップしたあとは
04 自分辛かったんですね、いることがここに。もうひ
05 とのまわりの目が気になるし、なんかどう思われている
06 のかがほんとうに嫌だったというか。それをSさんは
07 1か月も耐えたんですね。最初のスリップから。だ
08 からSさんのその時の気持ちをこうわかったというか、
09 よく耐えたなと思って。そんなときSさんにたいして自
10 分がしたこと、申し訳なくは思ったんですけど。《略》

[11/12/13 ④回目インタビュー]

Yダルクに入寮してクリーンを維持していたHさんだが、抜粋7のインタビュー後にスリップする。抜粋8はスリップ後の最初のインタビューからのものであり、自分がスリップしたことに関連して語られている部分だ。このインタビューの直前にHさんは飲酒してしまう。本命の覚醒剤ではないが、ダルク利用者にはアルコールも禁じられておりスリップとなる。自分がスリップして、「まわりの目が気になる」し(05行)、「自分辛かった」というのである(04行)。

つまり、スリップをした人間は非難されるべき存在であるという観念をHさんが持っていたことがうかがえる。だからこそ、自分がスリップしたときに、「辛」と感じたのだ。そして、SさんにたいしてHさんがそのような目で見ていたことが語られる。Hさんを含めた「まわり」からの批判の目、「それをSさんは1ヶ月も耐えた」(06-07行)。自分がスリップをして初めてこのことに気づいて「申し訳なくは思った」(10行)のである。

スリップをした人が嫌い、嫌いだから出て行ってもらいたいと密売人の電話番号を教えた、というHさんの行為は、自分の身を守るためであったことがわかる。スリップをしているひとがそばにいと巻き込まれてしまう。Yダルクを安全な居場所とするワークとして、Sさんに密売人の電話番号を教えたという事情をここにみることができる。

8 「守られていた」

ダルクやNAに通って薬物からの離脱を目指しているひとには、たとえ本人からの要請があったとしても覚醒剤の密売人の連絡先を教えるといったことはなすべきではない。このような規範があり、HさんはSさんに教えたことについてYダルクのスタッフから注意を受けた。Hさん自身もすべきではないと理解していたものの、しつこくせがまれたうえに、自分も薬物再使用に巻き込まれる危険を感じて(そのために「嫌い」となり)、出て行ってもらいたいと電話番号を教えてしまった。

5節で検討した、携帯電話番号の変更というBさんの行為が直接的な自己コントロールであるのとは対照的に、ダルクを出て行く結果となることを期待して密売人の電話番号を教えるというHさんのワークはコントロールとしては間接的なものである。自分がダルクを出て行きたくなったときの逃げ道としての知人の電話番号を捨てるという6節で取り上げたエピソードと合わせて、居場所づくりのワークであると本論が位置づけるところである。

薬物依存からの回復プロセスを考えた場合、居場所づくりはその最初期に問題となるものだ。Aさんのダルク歴は15年以上でBさんも5年であるのにたいして、Hさんはようやく1年になろうかというところである。薬物からの離脱の初期は身体的にも精神的にも薬物の影響が残り、

直接的な自己コントロールをうまく行使することができない。XダルクやYダルクでは、クリーン1年という断薬期間を達成してからつぎの回復ステップを考えるという目安がある。

Yダルクで携帯電話の所持を禁じていることは、その意味で回復初期に安心して安全に生活できる場所を提供する居場所づくりを助けるものとなっている。Hさんの場合、そのことで守られたエピソードがある。抜粋8でHさんの飲酒スリップが語られているが、このときには実は、「逃げ道」である知人に電話している。Yダルクを出て行くのであれば泊めてほしいと依頼するためだ。だが、知人は不在で連絡がつかず、HさんはYダルクに戻ってきた。もし、携帯電話をHさんが所持していたら、折り返しの電話があつて連絡がついたであろう。そうなると、Yダルクを出て、最終的に覚醒剤の再使用というはめになったかもしれない。電話を受けるには、スタッフがいるオフィスの電話を使うしかないからこそ守られたと考えることができる。

インタビューでは、ほかに携帯電話不所持の帰結として、かつての悪い友だちと連絡が取れなくなったという点をHさんは挙げている。携帯電話を持っていたときには定期的に連絡を取り合っていた仲間だ。電話で話すことがなくなり、悪い誘いに巻き込まれることもなくなった。これも、携帯電話の不所持が居場所づくりとなっている側面である。

Hさんの事例は「居場所づくり」のためのコントロールと呼ぶのが最適であるように思われるのだが、それには、Hさんがダルクにつながって入寮しての最初期であるということに加えて、これまでの人生において施設暮らしが大半を占めていたという事情が関係しているのかもしれない。そのようなHさんが、Yダルクを居場所とすることにまず専念したということは回復にとって最重要な一歩であったように思われる。信頼できる人びとに囲まれ安定した環境で暮らす。そこでは、リスク回避のコントロールを四六時中自分で心がけている必要はない（平井2009）。「守られている」、保護されている場である。そのような場を作り上げるためには、物理空間を超越する手段である携帯電話の／携帯電話を介してのコントロールが不可欠であるという点を本論は明らかにした。

* 本論は、科学研究費補助金基盤研究（C）22530566「ダルクにおけ

る薬物依存からの『回復』経験のエスノグラフィ』（代表：南 保輔）の研究成果の一部である。調査に協力していただいたXダルクとYダルクのみなさんに大いなる感謝の念を表す。また、調査チームである「ダルク研究会」のメンバーにも感謝する。抜粋1と2は、「ビデオデータセッション」研究会（2012年6月16日成城大学）で提示した。出席者と寄せられたコメントに感謝する。

註

- 1) ナルコティクスアノニマスのもっとも重要なテキストである通称「ブルーブック」の冒頭に以下のようにある：「Very simply, an addict is a man or woman whose life is controlled by drugs」（2008：3）。原文の「control」は、邦訳では「人生のすべてが薬物に支配されている人間のことだ」とあるように「支配」と訳されているのだが、「コントロール」を使うと「薬物にコントロールされている人間」となる。
- 2) この抜粋では、聞き手である調査者が発したいわゆる相づちは省略している。抜粋の末尾にインタビューの日付とパネルインタビューの何回目かを示す。凡例は以下であるが、抜粋ごとにどれぐらいの詳細さで記号を使用しているかは異なっている。

引用符「」は、生き生きとした口調で再演していることを示す（再演については、南 2008を参照）。そのほか、抜粋の凡例は以下である（Jefferson 2004；西阪 2008：9-13）：

- [複数の参与者の発する音声が重なり始めている時点は、角括弧（ \lbracket ）によって示される。
- = 2つの発話が途切れなく密着していることは、等号（=）で示される。
- () 聞き取り不能な箇所は、（ ）で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。
- (言葉) 聞き取りが確定できないときは、当該文字列が（ ）で括られる。
- (m.n) 音声が途絶えている状態があるときは、その秒数がほぼ0.2秒ごとに（ ）内に示される。
- (.) 0.2秒以下の短い沈黙は、（ ）内にピリオドを打った記号、つまり（.）という記号によって示される。
- 言葉：： 直前の音が延ばされていることは、コロンで示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
- h 呼気音はhで示される。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。

- .h 吸気音は .h で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- () 発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる。
- 3) R と Q は調査チームのメンバーであるが、特定はしていない。その抜粋において最初に発言する調査者を R としている。
- 4) 一気呵成に使用に至るといふ図式は、2 節の抜粋 1 で見た、「あした給料日なんで、じゃああした買いにいきますよ」と密売人に電話してからも「いろいろ考え」た A さんの言動とは対照的なものである。一気呵成モデルが H さんのように回復初期の人間に特有なものと理解されているのかという点は今後の検討を要する点である。
- 5) 居場所づくりと携帯電話というトピックからは逸れるが、「病気の人はそうだから」(05行) という言い方にも着目したい。薬物依存症は「病気」であるということ を主張している点だ。薬物使用は「嗜癖」であり、「かんたんにやめられる」ものだという一般通念があるように思われるが、それとは異なる見解を提示している。しかも、入寮当初の H さんがこれを見て、「病識」といふか依存症は病気であるという見解に触れていることも重要である。体系的に論じることはここではできないが、自己の「欲求」について適切な理解をすることが回復にとって重要なことであると思われる。
- 6) 本節冒頭「追い出す」といふ表現を使った。抜粋 7 ではこのことばは使われていない。その少し前のところで、抜粋 7 のエピソード全体をまとめて報告する部分で H さんが使った表現である。抜粋 7 は、これを詳しく話してもらいたいという調査者の要請に応じて話されている部分だ。

引用文献

- 平井秀幸. 2009. 「犯罪」と「病気」の二重化：刑事施設における「特別改善指導（薬物依存離脱指導）」を対象とした、処遇上の諸カテゴリに対する指導者の意味付与メカニズムにおけるマイクロ社会学的分析. 『教育学雑誌』（日本大学文理学部）44：61-84.
- 宝月 誠. 1998. 『社会生活のコントロール』恒星社厚生閣.
- 宝月 誠. 2004. 『逸脱とコントロールの社会学：社会病理学を超えて』有斐閣.
- 宝月 誠；進藤雄三編. 2005. 『社会的コントロールの現在：新たな社会的世界の構築をめざして』世界思想社.
- Jefferson, G. 2004. Glossary of transcript symbols with an introduction. In Lerner, G. H. ed. *Conversation analysis: Studies from the first generation*. John Benjamins. 13-23.
- 上岡陽江；大嶋栄子. 2010. 『その後の不自由：「嵐」のあとを生きる人たち』医学書院.

- 近藤恒夫. 2009. 『拘置所のタンポポ：薬物依存再起への道』双葉社.
- 熊谷晋一郎；綾屋紗月. 2010. 痛みとアディクト. 『現代思想』38-14：80-96.
- 南 保輔. 1995. 海外在住日本人母親のコミュニケーション行動. 『コミュニケーション紀要』10：101-152.
- 南 保輔. 2008. 徹子が黙ったとき：テレビトーク番組の相互作用分析. 『コミュニケーション紀要』20：1-76.
- Narcotics Anonymous. 2008. *Narcotics Anonymous*. 6th. ed. Narcotics Anonymous World Services. = 2006. 『ナルコティクスアノニマス』第5版日本語翻訳版.
- 西阪 仰. 2008. トランスクリプト（転写）の記号一覧. 西阪；高木智世；川島理恵『女性医療の会話分析』文化書房博文社. 9-13.
- Srinivasan, Ramesh. 2007. Ethnomethodological architectures: Information systems driven by cultural and community vision. *Journal of the American Society for Information Science and Technology* 58: 723-733.
- 谷口万稚. 2011. 『アルコール・薬物依存症とそのケア』キリスト新聞社.
- White, William L. 1998. *Slaying the dragon: The history of addiction treatment and recovery in America*. Chestnut Health Systems/Lighthouse Institute. = ウィリアム・L・ホワイト. 2007. 『米国アディクション列伝：アメリカにおけるアディクション治療と回復の歴史』鈴木美保子；山本幸枝；麻生克郎；岡崎直人訳. ジャパンマック.

Controlling Cell Phones to Create *ibasho* :
Aspects of 'Recovery' Experiences from Drug Addiction

Yasusuke MINAMI (Seijo University)

yminami@seijo.ac.jp

The Drug Addiction Rehabilitation Center (DARC) is a Japanese organization that was established to support recovering drug addicts. The DARC operates halfway houses in about 60 cities in Japan. In order to investigate the common features and variations of the recovery process experienced by drug addicts, 15 recovering addicts who were attending the 'meetings' at X and Y DARCs, located in major urban areas, were interviewed.

One of the research findings is the unique character of information ecology of recovering addicts, in which cell phones provide an almost exclusive access to illegal drugs. As a general rule, X and Y DARCs prohibit inmates from having cell phones. One recovering addict was allowed to own a cell phone after getting a job, and soon had a relapse. Another recovering addict had to change cell phone numbers several times so that people who wanted to use illegal drugs with him could not contact him.

An example of creating *ibasho* was illustrated by the behavior of Mr. H who was in his early 20s and in the early stage of recovery. He had a phone number of a friend at whose place Mr. H wanted to stay in case he was forced to leave Y DARC. After several months at Y DARC, he had become comfortable and threw away the number. Mr. H also had a phone number of a drug dealer. He let the number be known to another recovering addict at Y DARC. That individual had a relapse and was moved to another halfway house. Mr. H's manipulation of phone numbers was interpreted as an attempt to make Y DARC *ibasho*, a safe, comfortable place where recovering addicts can focus on stopping their use of drugs.

KEY WORDS : recovery, drug addiction, information ecology, cell phones, *ibasho*